

川瀬 浩介

作曲家・美術家

トヨタ コレオグラフィーアワード2014・選評

真の教養とは、再び取り戻された純真さに他ならない。(ゲーテ)

嫌な予感がした——最終審査会へ向けて送られてきたファイナリストたちの資料を確認して、当日の僕の混乱が予見できたからだ。一次審査で選り抜かれた6組のファイナリストたちは、実に多様性に富んでいて、何をもちて《次代を担う》と捉えるのか？ そのための評価軸をどこに設けるのか？ それが想像つかなかった——審査会当日、ステージの幕が開いたとき、その嫌な予感は見事に的中した。

当日のことを振り返る前に、自らに課した「僕自身がゲスト審査員として参加することの使命」を述べておきたい。一言で言えばこうだ——初めて劇場に足を運ぶような観客の視線をも大切にすること——これは、一作り手としてのス テイトメントでもあるのだが、僕は自らの表現に対して常に疑問を抱いている ——誰かのことを想わずして表現などできるのだろうか？——と。

「すべての作品には作家の思想や哲学が備わっていて、優劣などつけようのない不可侵な事象である」ことに異論はない。僕自身の作品についても同様だ。どんな表現をしようと作者の自由である。しかしながら、「新しい価値観の創造」「問題提起」などという言い訳を楯に、「世の中との接点」について考え尽くされていない、いわば「自己完結」と見受けられても仕方のない表現が溢れているように感じられる。そうした、いつの時代も先端芸術表現につきまとうある種の文脈を超えたい...自分の仕事においては、そうありたいところがけてきた。芸術性を重んじるばかりに鑑賞者を置き去りにするようなものだけにはしたくない。一方で同時に、観客の視線ばかりに注力するようなものであってはならない。芸術性と大衆性を兼ね備え、いかにそのバランスを見極め、整えていくか？ 僕にとっての創作は、そのために悶絶した日々の記録でもある。

審査をする立場として自分のなかに「基準」のようなものを設けたとしたら、同じ表現者として「同志」のような想いを覚える相手を選ぶこと——ダンス表現の未来を拡張していくために、振付や演出だけに留まらず、新しいファンを獲得しようという視線を備えていることを意味する。斬新さや奇抜さなど全く必要ない。いつか遠い未来に「歴史として認証される」のではなく、いま目の前にいる誰かを喜ばせたい...そんなすぐそこにある明日の景色をみせてくれる作家に出逢えることを最終審査会の間、ずっと待ちわびていた。それは僕が青く多感な時代に音楽に巡り会ったときのような...そう、まさに理屈抜きに「恋に落ちてしまう」ような...そんな瞬間

だ。

ところが、そんな淡い期待は見事に打ち砕かれた。全6組見終わったとき、僕はやはり混乱していた——コンテンポラリーダンスの文脈を感じさせつつ、「生活」や「生立ち」といった詩的な物語を丹念に描いた木村玲奈——「振付とは何か?」について美術の文脈から再定義させようと挑戦する塚原悠也——舞踊やヒップホップなど、一度完成をみた表現を解体・再構築していくような試みを展開した振子びじん——「都市に棲む音」をサンプリングした音楽を用いながら、繊細さと過激さを巧みに操り現代社会を映し出そうとした川村美紀子——「太め」という自らの身体的特徴を逆手に取り、コミカルさと妖艶さと毒々しさを散りばめながら、ある種の夢物語を綴った乗松薫——大勢のダンサーを従え、演劇的な賑やかさと華やかさで観衆を魅了する完成度の高い「舞台」を見せてくれたスズキ拓朗——各作品を分析的に見つめると、僕にはこのように映った。

どの作品も、各々の個性や特徴がよく現れている。各自のキャリアをみても、この舞台でその作品を見せてきた背景も想像できる。ただ、「圧倒的」なものはない。僕が混乱したのは、これだけの多様性を生んでいる現状は、「豊富な可能性」というよりも、「混沌としたダンスシーンの現状」を表象しているのかもしれないと感じたからなのではないか? いくらか時間を置いた今、そんなふう思うことがある。

それは、音楽の世界も同じだからだ。昔のように、誰もが知っている曲はもはや存在しないと言っても過言ではないだろう。情報を得る手段も豊富にある近代において、趣味趣向が細分化した結果生み出されていった多様性がもたらしたのは、「繁栄に見せかけた飽和」である。それぞれの個性をそれ相応に評価することは可能でも、それが果たして《次代を担う》対象として相応しいのだろうか? そんなことを自問しながら、頭の中では「該当者なし」という言葉が浮かんでいた(本アワードにおいて過去にその例はないという)。

では、僕は誰に票を投じるのか? そこで今一度、「観客の目線に帰る」ことに努めた。つまりこうだ——「もう一度みたい」「この続きを知りたい」——そう思わせてくれた作家をまず二組、選んだ——塚原悠也とスズキ拓朗である。

塚原の作品に関しては、「美術の文脈では過去にも例があるもの」とも捉えられるが、僕自身はそこにはこだわらなかった。むしろ、あの苦悶の表情を浮かべた20分近くのパフォーマンスが1本の舞台作品にまで昇華されるのだとしたら...「これがダンスか?」と問う以前に、その先にどんな展開になるのか見てみたいという好奇心が勝ったからである。同時に、よく語られる「定型の評価軸」(歴史や文脈を踏襲した...といった類いの)を崩したいという想いもあった。作品の文脈や哲学を感じ取れる観衆だけをたよりにしては、望む「次代」は訪れるはずもないからだ。

一方、スズキの作品については、いや、作品というより「彼」といった方がいいかもしれない。僕は彼に激しくシンパシーを覚えた——以下は僕の想像である——「ゆうびんやさん~おとしもの~」という日本人なら誰しも記憶にあるであろう縄跳び歌のフレーズを用い、大勢のダンサーたちと繰り広げるダンスは、コミカルでユーモラスな印象とは裏腹に、どこか物悲しさを漂わせていた。ほかのダンサーたちと積極的に絡むことなく独り「ゆうびんやさん」を演じるスズキの姿は、道化のようにも映る——彼は、こういう場において自身の仕事が十分に評価されることはない、どこかで自覚しているのではないだろうか?——「これはコンテンポラリーダンスなの?」「アートというよりエンターテインメントでは?」——これまでもそう揶揄されることも少なくなかったのではないだろうか?——それでも我が道を貫こうとする気概のようなものを、僕は彼の姿から感じた。

賑やかな作品の印象から見過ごされがちなのは、彼の身体能力の高さと演出・構成力であろう。当日の本番ではわずかであったが、彼がソロで踊るシーンの身体のキレは圧倒的だった。また、ある種の「わかりやすさ」で埋もれてしまっていたのは、音の取扱い。「ゆうびんやさん~」の縄跳び歌は、ダンサーたちによる歌唱によってダンスと共に言葉の順序が入れ替わるように変奏されていく。それは、言葉の意味そのものを消失させ、サウンドとしてのリミックス効果を生み出させるだけでなく、リミックスによって入れ替わった言葉の順序によって、また別の意味合いや風景を浮かび上がらせる展開を感じさせていた。また、音楽家との協働により、オリジナルスコア(「スコア」と記したのは、リズムや既成音源の編集ではなく作品のために「作曲」された音楽という意味)を用いていたのも彼の作品だけだった。また、舞台上では、衣装や小道具として登場した「紙」が放つ音も巧みに、そして自然に導入されていた——擦れる音、ばらまく音——舞台という空間を使い切り(お手本のようなものではあるが)、理屈抜きに観衆を楽しませるといふ側面を含めても、非常に高い総合力を備えていると断言していいだろう。ここまでの能力があるということは、仮に、彼に芸術性だけを追求した作品を求めても、期待以上の成果を上げてくれる...そんな気がしてならなかった。しかしながら、審査会で僕の想いは届くことはなかった。無念である。

アワードを決める段になり、僕が最終的に票を投じたのは、川村美紀子だ。彼女については、個人的な記憶がある。かつて作曲家として携わった現場でのこと、屋外での本番に乱入されたのだ。そのときの印象が僕には強過ぎたようだ。アワード本番で見せてくれた作品に対して、僕は拍子抜けしてしまった——きっと過激に攻めてくるに違いない——僕は自ずとそんな期待をしていた。それゆえに、本番でみた彼女の作品は、とても丁寧にまとめてきた...そう感じてしまった。それが初見での印象を鈍らせたのだと思う。

ではなぜ、僕は彼女を推したのか? 最初に票を投じなかった最大の理由は、僕の音楽家としての個人的な視点からの分析によるところだった。それはつまり、「この曲を使って踊れば、誰で

もかっこ良く見えてしまう」と思われてもしかたない選曲をしていたこと。それが気がかりだった。しかし、審査会で議論をしている中で気づいたことがある——彼女は、僕が思い描いていた天才型の作家というよりは「秀才型」——音楽や照明の使い方、作品テーマの見だし方など、コンテンポラリーダンスの歴史や文脈を学び、それをいま、まさに進行形で吸収している段階にあるのだ、と。無論、それは彼女が未だ「荒削り」とであると評しているわけではない。アワードに相応しい完成度と存在感を放ちながら、今なお、無限の可能性を感じさせている。そして現行の「秀才」として学び得たことを消化して自分の肥やしとなったとき、「天才」として生まれ変わるときが訪れるのかもしれない...審査の過程を通じて、そう確信するようになったのである。

授賞式の壇上での彼女の表情をよく覚えている。オーディエンス賞から発表され、彼女の名前がまず読み上げられたとき、声もなく、不安げな表情を浮かべながら登壇してきた。きっと「アワードを逃した」と思ったのではないだろうか?(彼女は、アワードとのダブル受賞を果たした)舞台を下りると、見た目の印象とは対照的に、か細い声で語り、控えめな振る舞いを見せる彼女...アワードが発表された瞬間、身体いっぱい喜びを表してくれたときには、僕の中に親心のような気持ちが湧いていた。

冒頭に引用したテキストは、授賞式のコメントでも触れたゲーテの言葉である——真の教養とは、再び取り戻された純真さに他ならない——ひとりの表現者として、僕自身も常に念頭においている言葉だ。創作を行うなかで、「新しいもの」「誰もまだやっていないもの」を追求したくなる、いわば「蒼い時代」は必ず訪れる。それは誰もが通る道だ。しかし、そこに埋もれてはいけない——あるジャンルの、いや、自分という小さな箱の中に留まっているわけにはいかないのだ。なぜなら、我々表現者には使命がある——誰かのこころの中に眠る感動を呼び覚まさなくてはならない——人は誰かの純真さに触れ、初めてこころ躍らせるのだ。